

## レキシコン研究：

### 第2言語習得での [主要部名詞+補文 *that*-節 (同格)] 問題

田 部 滋

レキシコン研究での統語・意味情報のインターフェイスの問題を第2言語習得を論じる中で考察する。第1言語習得の大筋については、普遍文法(UG)の原則の存在を仮定し、そのパラメータの値の決定による習得という見解を基盤にするが、そのUGが第2言語習得にも有効に関与するか否かが当面の問題である。「主要部名詞+*that*-節 (同格)」に関わる問題を日英語の分析を通して、UGの部分関与説を立証する。分析の過程で、語彙目録と統語・意味上のインターフェイス問題が考察の「カギ」となる。名詞の中には意味・統語特性の普遍的な部分と個別言語文化の特異部分が共存する場合があります、第2言語習得が単純な場合と、微妙で複雑不可解な場合があることを明らかにする。

#### 1 「主要部名詞+補文 *that*-節 (同格)」

##### 1.1. 研究の目的

本研究は、(1) L1とL2に観察できる普遍文法を考察し、UGがL2言語習得に効果的影響(部分関与)を与えることを概観する。続いて、(2) ケーススタディとしての特定の言語事実をふまえてL2習得を考察する。英語を第2言語として習得する者にとって、*that*-節の中の論理形式と融合する主要部名詞の意味・統語構造<sup>1</sup>との写像にあたって、予想を可能にする基準となるものが見つかれば、SLAにとって有益であることになる。このことは、実質上、lexical semantics - syntax interfaceの問題の一つを考察することによって得られる結果である。個別言語ごとに、いかなる特定名詞と*that*-節、あるいは日本語での「という」(時に随意的)の融合が容認されるのか、実際のデータの中で検討し、両者を比較することである。これによって、融合規則を導き出し、

それが両言語に共通なるものであるかないかを立証することで、UGの関与説の根拠とする。すなわち、UGの全面・部分関与、あるいは関与がないのかを見極める。

## 1.2 「という」と「that」に導かれる補文節

「という」(提示された事態をとりたてて断定または認定して、下の叙述につなげる。実質的な意味を失い、... のことばで表示されるものである。... である、などの意を示す形式化した用法: 「広辞苑」)と「that-節」によって導かれる同格節は、普遍文法の下位理論(Xバー理論)によって、語順に関するパラメータの部分を除いて、その基本的句構造が決定されていると考える。

英語の補文 *that*-clause と日本語の「という」の補文標識によって導かれた節を比べると、あきらかに類似している。際立つ類似点は、(1)補文の位置は明らかに違っているものの (head-first vs. head-final), *that* と「という」という補文標識の存在があって、それらの適格性が生み出されている、ということである。(2)主要部名詞の「中心的意味内容」は、「という」と「*that*」に導かれる連体節(=名詞節)によって具体的かつ詳細に叙述記載される。換言すると、関係詞節を「内の関係」とすればこの同格節は「外の関係」と呼ぶことができる。

経験をふまえて次の仮説を立てる:

仮説: 補文 *that*-節が担う文法関係は、それが融合する主要部の名詞(句)の意味・統語特性が分かれば、一定の普遍的対応規則によって予測できる。その名詞は、意味・統語特性において、①比較的抽象性の高い意味素性、②視覚的形狀に乏しい意味素性、③全体を総括する上位を占める意味素性などを、単一で、あるいは、複数個、内包している。

例えば、

- (1) a. Have you heard a rumor that he got married?  
b. 彼が結婚したという噂を耳にしましたか。
- (2) a. 彼が結婚したという話を聞きましたか。 (「話」=「噂」)  
b. Have you heard the story that he got married?

を検討すると、*rumor* とか、*story* などの名詞はどちらかと言えば、その仮説を支持する実例である。ところが、*book* などは *that*-節を後続しない。その類

の名詞は(4)のような構造になる。

- (3) a. その女優さんが離婚したという本を読んだか?  
 b. \*Have you read the book that the actress got divorced?
- (4) a. Have you read the book which tells that she got divorced?  
 b. その主人公が自殺した(という)本はよく売れる。  
 c. The book telling that the hero committed suicide sells well.

ここで興味をひくのは、英語文に対応すると思われる日本語文を見ると、ことさら英語文と同様な非文と断定することはできないことである。それらは適格文である。このことは、「本」と「book」の意味素性の相違を考察する必要があることを示唆している。book の意味素性は(5)に示めされている。各々の項目は「ある」「なし」という絶対的なものではなく、どちらかという「濃い」「薄い」のように相対的である。しかも、それぞれにさらに「度合い」があることに注意を向ける必要がある。

- (5) book : +concrete, +countability, +visibility, -abstractness, +semantic integrity, etc.

一方、「本」は「品物」であるが、どちらかと言うと、形、個数、色合い、という物質範疇への関心より、その名詞句表現が現実世界において何を指示するかということにより関心を集める。つまり指示対象 (referent) が問題になる。記号が伝達する意味の情報範疇に対する関心がもっとも高い。その「本」という語彙項目にはそれ以外の顕著な言語学的重要情報を盛り込まないようである。

## 2 日英語間での名詞の見方

### 2.1. 言語文化の視点

特定言語文化には言語表現の上で特定の作法とか好みがある。それは統語論的な拘束力ではなく、語用論的あるいは修辞論的な慣習的約束事のようなものである。下に言語文化的視点を述べた見解を引用する。

- (6) a. 語についてもどの語をどのような場合に使うかは社会的に一応決まっている。このような決まりはその共同社会で受け継がれる文化に属する事項であり、そこに生まれた人間にとっては習得しなければならない対象である (池上 1977 : 186-7)。」
- b. Quite a few of the present-day Indo-European languages agree with English in using an actor-action form as a favorite sentence-type. (Bloomfield 1933 : 172)
- c. There are connections but not correlations or diagnostic correspondences between cultural norms and linguistic patterns. Although it would be impossible to infer the existence of Crier Chiefs from the lack of tenses in Hopi, or vice versa, there is a relation between a language and the rest of the culture of the society which uses it. There are cases where the “fashoins of speaking” are closely integrated with the whole general culture, whether or not this be universally true, and there are connections within this integration, between the kind of linguistic analyses employed and various behavioral reactions and also the shapes taken by various cultural developments. Thus the importance of Crier Chiefs does have a connection, not with tenselessness itself, but with a system of thought in which categories different from our tenses are natural. These connections are to be found not so much by focusing attention on the typical rubrics of linguistic, ethnographic, or sociological descriptions by examining the culture and the language (always and only when the two have been together historically for a considerable time) as a whole in which concatenations that run across these departmental lines may be expected to exist, and, if they do exist, eventually to be discoverable by study. (Whorf, B.L. 1956 : 159)

長い歴史の中で育まれた文化的特異性を現実問題として直視することは当然である。

## 2.2 個別言語の特異性

次の日英両語での〔名詞+同格の *that*-節〕での名詞の文法性を考えてみる。

- (7) a. 彼の自動車が事故を起こした (という) 悲しい出来事を聞いた。  
 b. \*I was told the tragic accident that his car was crashed  
 c. 君がその問題で彼に挑戦する (という) その勇気は称えられて当然だ。  
 d. \*The courage that you will challenge him on that issue has to be praised.

「出来事・勇気」は普通名詞と抽象名詞であり、*accident* も *courage* も同様である。しかし、日本語では(7a)(7c)は適格文であるのに、英語では、(7b)(7d)が示すように *that*-節の後続は否定される。別の名詞にもこの現象が現れる。下に検証する。

- (8) a. \*What do you think about the poll that Labour has taken the lead?  
 b. \*There are data that there will occur over ten thousand traffic accidents within a year.  
 c. 労働党がリードしているという世論調査をどう思うか。  
 d. 1年間で1万件以上の交通事故が発生するというデータがある。

(8a)(8b)と(8b)(8d)で例証されるように、これらも日英語間で差が見られる。(8a)(8b)は

- (9) a. What do you think about the poll showing that Labour has taken the lead?  
 b. There are data which suggest that there will occur over ten thousand traffic accidents within a year.

(9)のように手を加えると英語として適格文になる。*that*-節の後続を拒否する主要部名詞の意味特性は上の(5)の *book* の意味特性と共通することが分かる。更に、*poll* 等の名詞は、

- (10) a. The poll found that 42 percent said Vice President Gore had won the debate, while 39 percent believed Gov. George Bush had done the better job and 13 percent called it a draw. (*Washington Post* 04/10/00)
- b. A CBS News poll released just before 11 p.m. gave the advantage to Gore by a larger 56 percent to 42 percent margin.

のように、主語となり、あたかも行為者としての地位を占める生物であるかのごとき表現の使用が許される。もっともこの類の表現は、日本語とは違い、英語では稀ではない。(6b)の指摘のみならず、心理言語学分野からも次の見解が公になっている。

- (11) In Indo-European languages, the model used for connoting states of affairs and articulating them linguistically is the human action model. A total event is basically articulated into agent, action, and object; the relationships between these are portrayed in sentences in which the vehicles for the referents are related to each other through a 'syntax of action'. (Werner and Kaplan 1963 : 57)

もっとも、(11)は常識となっていることを思えば、特記することではないかもしれない。

### 3 *that*-節の分析

#### 3.1. 英語の同格の *that*

「同格を示す *that*-節」について Biber et al. (1999) の見解を引用する。

- (12) *that*-clauses functioning as noun complements are one of the primary devices used to mark stance in academic prose. In these constructions, the *that*-clause reports a proposition, while the head noun reports the author's stance towards that proposition. (p.648)

(12)は一般的な主要部名詞は補文標識 *that* 内の知的情報に対する筆者の姿勢見方 (stance) を伝えるものとする見解を述べている。その枠組みに入り込めない場合（後述）もあることを承知したうえでの記述であることを熟知しておくのが肝要である。また、この主要部名詞に関して、単複の選択条件、決定詞の出現の有無などが関心の的になるが、前掲書は

- (13) **There is a pronounced tendency for the noun phrases taking noun complement clauses to be definite and singular. This tendency is strongest with *that*-clauses: almost all *that*-clauses have a singular head (over 95%), while most *that*-clauses have heads that are both definite and singular (c.85%). (P.648)**

としている。興味ある事実であるが、その統計値に入らぬ事例には事欠かない。

- (14) a. **We can reiterate our conviction that the differences between Taiwan and China ought to be resolved peacefully.**  
 b. **The report provides further proof that the Clinton-Gore Administration's investments to reduce class rings are making a difference. (The White House, 07/10/00)**  
 c. **You said that there were no indications that it involved your presidency. (The White House)**  
 d. **There is also recognition that these practically driven problems have extraordinary range.**  
 e. **Can you put to rest rumors on Wall Street that Treasury Secretary Rubin is going to be leaving soon?**

主要部名詞には、①不定冠詞付き、②定冠詞付き、③無冠詞の複数、④無冠詞の単数、⑤冠詞以外の決定詞付き、など多様な現象が見られる。これは名詞の本来の形態論的特性に加えて、旧・新情報<sup>2</sup>、英米語の言語文化的要因などがあると思われる。もっとも、Leech教授が「言語学フォーラム」(明海大学大学院院生有志の研究会)で、

- (15) **The native speaker has very incomplete knowledge of grammar**

as used in different registers of speech and writing. This is true also of different dialectal varieties - e.g. American English vs. British English. Native speakers have a very uncertain knowledge of frequency. Often the choice between grammatical constructions is a matter of preference, ... (Leech, G. 26/10/00)

と述べているが、この類のように多種多様な事項になると一般化はいっそう困難を極める。

### 3.2. 本来の名詞と動詞の転成による名詞

主要部名詞は本来名詞（下記(16)）であるものと、動詞から転用された名詞（(17)参照）がある。

- (16) a. How different from the very first student teacher I supervised who hadn't a clue that classroom discipline was necessary? (*English Journal* 88, 4, 23, '99)
- b. I sent a message to her that I'd be late.
- c. Officials weren't certain whether his decision had anything to do with the diagnosis in May that he has prostate cancer. (*The Boston Globe* 07/08/00)
- (17) a. Second, there is a general recognition that linguistics needs to be included as a core knowledge base in the work of applied linguistics. (Kaplan & Grabe 2000 : 4-5)
- b. Sony's announcement Tuesday that it would undertake aggressive restructuring also encouraged Japanese investors, traders said. (*New York Times*, 09/03/99)
- c. I'd like to make a very solemn statement that I have no knowledge whatsoever of any allegation of espionage or the theft of nuclear technology.

(16)と(17)の間に当該問題について顕著な相違はない。もっとも後者に関して、意味上でその両者に使用分けがあるかどうかを検討する。主要部名詞は、筆者の姿勢（スタンス）を表示するという Biber et al. (1999) の見解は当たらない。



い。明らかに *that*-節は本来は転用前の動詞の目的語相当節になっていると解析される。

なお、下の(18)は「同格の *that*-節」と融合する名詞、融合しない名詞を再考している。

- (18) a. The theory that words work by a conventional pairing of sound and meaning is not banal.  
 b. They established the principle that public education must be a national priority.  
 c. \*Don't forget to send us a postcard that you'll be enjoying your trip.  
 d. \*There are sufficient data that a number of typhoons will hit the land this summer.

これで、*that*-節との関連で、theory, principle, rumor, story, message のグループと、data, postcard, book, accident, poll, などのグループの存在が分かる。前者に共通な特性は、どちらかと言えば、抽象性、理念性などの点で高いが、後者は具象性、視覚性などの点で高い。なお、後者は、

- (19) a. There are sufficient data to show that....  
 b. What do you think about the poll showing that....  
 c. Don't forget to send us a postcard to let us know that....  
 d. Have you read the book arguing (or claiming) that...?

のような表現になると容認できる。（...直後は適切な語群を入れることを示す）

### 3.3. 形容詞の名詞化

本来の形容詞が転成によって名詞になり、[noun + *that*-clause] を形成する場合。

- (20) a. We will also be faced with the strong likelihood that a chimp is capable of thinking.  
 b. But there remains a possibility that the firm is economically

viable.

- c. We think of the certainty that Vance will resign at the end.

(20)は、派生の過程で *it is likely that.... it is possible that.... it is certain that....* があると仮定される。下の(21)は [adjective + *that*-clause] の過程を経ていると推理する。

- (21) a. There is a growing awareness that many people have difficulties with the everyday speech of native speakers. (*TESOL Journal*)  
 b. He showed his anxiety that the party should return safe. (『研究社大英和辞典』)  
 c. He had a dim consciousness that someone was pursuing him. (前掲書)

一方、(20b) (20c) (21b) (21c)の知的情報においてそれに相当する日本語表現になると、

- (22) a. その会社は経済的に手際良く処理する可能性がある。  
 b. ヴァンスは結局引退するのが確実だと思う。  
 c. 無事の帰還を念願している様子だった。  
 d. 追っかけられていることを漠然と気づいた。

となり、いずれも適格文であることが分かる。

### 3.4. 特殊表現

英語には、*determine* を *make* (a) *determination* と表現を操作変更することがある。その形態を生かして、動詞より転成された名詞と *that*-節とを融合することができる。当然ながら転用された名詞は意味的に抽象性が高く、いわば意味の上位語になる。

- (23) a. Discovery that phenomena are “overdetermined” has commonly been taken to indicate a theoretical deficiency that

should be overcome by new or refined principles. (Chomsky 1995: 29) (注：Leech 教授は冒頭を *The discovery* と筆をいれた)

- b. This acquisition procedure provides graphic demonstration that we can naturally embed a transformational theory of grammar into a working model of language acquisition.

### 3.5. 「という」にマイナス転移で生じた誤文

日本語では抽象性の高い意味を持つ名詞には「という」という補文標識で導かれる補文を英語に比べて自由に表現できることは上に述べた。これが負に転移して、次の英語文を書いた英語学習歴8年の大学生がいた。

- (24) \*Those days my composition that I thought it was well done for me as an elementary school girl wasn't highly estimated by my teacher.

(24)では大きな問題点がある。*composition* は視覚性、具象性が濃く、*that*-節との同格を成すための融合は否定される。この(24)に代表される誤解は、日本語では名詞の多くが高い抽象性を帯びて使用することが可能なので、すなわち、意味の上位語の位置を占めやすいので、「という」補文標識を後置した補文が融合しやすいのである。英語の名詞句表現では、日本語のそれに類似した情報部分はあるものの、形態論的・意味論的・統語論的素性が、日本語のそれらに比べて、錯綜しているので、*that*-節との融合条件がどちらかと言えば、厳格なものであると思われる傾向が強い。ここに第2言語として英語を習得する難問が存在している。

## 4 同格節で重視すべき名詞の素性

日本語と英語での名詞（句表現）の語彙項目情報に顕著な相違がある。

- (1) 英語の名詞の意味・統語特性に内包される顕著な素性  
 (i) 抽象性（観念・概念など） (ii) 個性性 (iii) 視覚性 (iv) 数・量  
 (v) 空間性 (vi) 意志・感情の内包 (vii) (生体のごとき) 認知能力など

- (2) 日本語の名詞の意味・統語特性に内包される顕著な素性的映像, 観念, 概念, 思想, 思惑, 懸念など

両言語に共通な部分は意味の上位語となる抽象性の高い語彙項目に見つけられる。例えば,

- (25) a. 「事実」 ⇔ fact b. 理論 ⇔ theory  
c. 原理 ⇔ principle d. 可能性 ⇔ possibility

であるが, 抽象性が高いと思われる語彙項目でも英語文では *that*-節との融合ができない場合がある。(26)はその一例である。

- (26) a. \*He will conduct a service in remembrance that the young soldiers were killed in the war.  
b. \*Irab was tired of inquiries about the appearance that he had stopped competing.

(26)はそれぞれ, (26a)では *in remembrance of the fact that...*とか, *in remembrance of the young soldiers killed in the war* とかに, (26b)では, *the apparent fact that...*などと修正する必要がある。統語構造の分析は別稿にゆずる。

## 5 むすび

同格を表す補文を導く「という」補文標識の知識・運用を獲得した(パラメータの値を設定した)日本語話者が, 英語の同じ同格節を導く *that* 節のパラメータの値を再設定することは基本的に可能であることが分かった。つまり, 普遍文法の SLA への関与の一つを実証したことになる。ところが, 本稿の補文という枠組みのすべてにわたって, その関与があるとは言えない部分の存在も判明した。その「UGの部分関与説」の原因は, L1とL2それぞれの主要部の語彙項目が, 本来的に持っている意味の特性, 特に言語文化的背景が濃く彩る意味素性があり, それが両言語間の意味情報の違いをもたらす主な原因となっている。普遍文法の全面関与説が説得力に欠ける理由がここにある。このこと

は、レキシコン研究の統語・意味情報のインターフェイス問題を容易ならざるものとすると同時に、その研究の領域・深さ・密度の濃さを示唆している。

上に記述した仮説は検証され証明された。なお、下記事項も追加併記される必要がある。

- 「補文+という+主要語名詞」と「主要語名詞+*that*-節」の構造上の特徴
  - (1) 「主要部+*that*-節」において、その主要部が心的映像的、高度の抽象的名詞であれば普遍文法の範囲で処理される（普遍文法の一つの下位原理）。
  - (2) 名詞の形態語彙論的特徴が比較的顕著な英語と、そうでない日本語との間では、それぞれの個性が発揮されて、意味特性において普遍性に欠ける部分がある。
  - (3) 意味・統語素性に対して、言語文化的影響が指摘される。
  - (4) 主要部の名詞は意味階層の上位に位置するものである。
  - (5) 英語・米語には地域差があり、主要語名詞の中に言語学的変異が見られる。
  - (6) 指示対象には、意味総括性の濃淡、数量の多少、抽象性の高低、など程度の差異が存在し、文脈によってその度合いが決定される。
  - (7) 日本語では、名詞を「心的映像・概念・理念」という素性を照合し、個々の名詞の形態論的特徴を問う事項は極めて少ない。一方、英語では「抽象・具象・視覚性・個性性・数量性・空間性・意志・認知」などの素性が常に照合され、形態論的に拘束し、明示し、意味を重層構造的に捉える傾向が著しい。

注 (1) Representations at each syntactic level (i.e., LF and D- and S-structure) are projected from the lexicon, in that they observe the subcategorization properties of lexical items. (Chomsky 1981: 29)

(2) The strong preference for definite head noun phrases with complement clauses is a further way of backgrounding the reported stance, since it carries the implication that the noun phrase is known information. In most cases, readers will not in fact know the information being presented. However, the use of the definite article suggests that the proposition is generally known, backgrounding the stance rather than presenting it as new information that is open to challenge. (Biber et al. 1999: 650)

追記： 本稿は、平成12年11月9日に明海大学【レキシコン研究会】にて「レキシコン研究における統語・意味情報のインターフェイス問題－第2言語習得の中での〔主要部名詞＋補文 *that*-節（同格）〕に見る普遍文法の部分関与説」と題した口頭発表原稿を改訂したものである。その際出席者より貴重なご意見をお寄せくださり、Geoffrey Leech 客員教授には高闊を賜った。深謝いたします。なお、本稿の責任は筆者のみにあることは言うまでもありません。

## REFERENCES

- 阿部純一他 (1997). [人間の言語情報処理：言語理解の認知過程] 東京：サイエンス社
- Beck, M-L. (Ed.). (1998). *Morphology and Interfaces in Second Language Knowledge*. Amsterdam: John Benjamins.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S. & Finegan, E (Eds.). (1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow, Essex: Pearson Education.
- Bloomfield, L. (1933). *Language*. London: Allen and Unwin.
- Brown, K. & Miller, J. (Eds.). (1996). *Concise Encyclopedia of Syntactic Theories*. Kidlington, Oxford: Elsevier Science.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- (2000). *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clahsen, H. (Press. Ed.). (1996). *Generative Perspectives on Language Acquisition*. Amsterdam: John Benjamins.
- Epstein, S.D. & Hornstein, N. (Eds.). (1999). *Working Minimalism*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Herschensohn, J. (2000). *The Second Time around Minimalism and L2 Acquisition*. Amsterdam: John Benjamins.
- 池上嘉彦 (1977). 「意味の体系と分析」[岩波講座日本語9 語彙と意味] 東京：岩波書店
- 橋田浩一他 (1997). 「言語の獲得と喪失」 東京：岩波書店
- Juffs, A. (1996). *Learnability and the Lexicon: Theories and Second Language Acquisition Research*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jusczyk, P.W. (1997). *The Discovery of Spoken Language*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Klein, E.C. & Martohardjono, G. (1999). *The Development of Second Language Grammars: A Generative Approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Lappin, S. (Ed.). (1996). *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*. Oxford: Blackwell.
- Leech, G. (26/10/00). Corpus-based Grammar. 明海大学「言語学フォーラム」での講演題

目.

- Levin, B. & Hovav, R. (1996). *Lexical Semantics and Syntactic Structure*. In Lappin, S. (Ed.), (1996).
- Lieberman, P. (1984). *The Biology and Evolution of Language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 宮島達夫 (1977) 「語彙の体系」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』東京：岩波書店
- 西田直敏 (1977). 「助詞(2)」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』東京：岩波書店
- Quirk, R. (1993). *English as a World Language*. In Ikegami, Y. & Toyota, M. (Eds.), *Aspects of English as a World Language: English Studies and Education in Japan*. Tokyo: Maruzen.
- Strozer, J.R. (1994). *Language Acquisition after Puberty*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- 田部滋 (1996). 「英語習得論のなかの英文法有標性研究」東京：リーベル出版.
- 田中章夫 (1977). 「助詞(3)」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』東京：岩波書店
- Towell, R. & Hawkins, R. (1994). *Approaches to Second Language Acquisition*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Tsimpili, I-M. & Roussou, A. (1991). Parameter Resetting in L2? *University College London Working Papers in Linguistics* 3, 149-169.
- Werner, H. & Kaplan, B. (1963). *Symbols Formation*. New York: Lawrence Erlbaum.
- Whorf B.L. (1956). The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language. In Carroll, J.B. (Ed.), *Language, Thought and Reality*. Cambridge, MA: The MIT Press.